

KODAK Gray Scale

LICENSED PRODUCT

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



李撰文選
利

#1
1182
5

60

65

70

75

80

85



李撰文選卷之三目錄

- 一 風賦
- 二 讀風賦
- 三 人序論
- 四 雷辭
- 五 詩序
- 六 名月賦
- 七 十六夜對
- 八 琴編
- 九 蕭琴箴

- 交櫻
- 六味
- 桃溪
- 六味
- 本飛溪
- 支極
- 桃溪



李撰文選

卷三

十一

十 大島若原の島若原傳

十一 時雨の況

十二 子ねの傳

十三 色と、穉

交楡

桃溪

交楡

六味

李撰文選卷之三

一 風賦

交楡

渾沌よりきて忽よあつちそ女色のフウと安下より
風と名付くかくとらふのち始まりとくや是とあめち
の吹ありといわれ利はの人此いひそあつらん瘧と風の
か一とあつちの族よりあつちく百病の長と八廣野の
か惑子ふりといれ一とわや厥陰の木のさの八運孔有傍
乃今よゆむむく晴動風動の偏ハかの和者たあつ下よ
音破す一とさくやいふようそのそある風かう池の
凍と海そめてサあまのたあね柳の髪たむすられ

古今和歌集 卷之三

とくくをさるひりの骨おせり致しさいの家を
 志しよ通ひひの骨は東風の夕涼はあらん増はふ
 汗のあかへるひり海もくもまよりををををを
 とさしむらばあひひ子舎あつひ目よんぬ杖を
 秋のあふよおとつととねむらつれ舎をれあふ
 四好そた夕まくれもまのちあをてあぬ帝のおらん
 目よる白雲を飛と海あぬひひるる海に日つ
 と奥よまの枝かひらとをさるれ木枯る果枝
 浦よ純す冬よ雪とくはやくわくの雪り花
 花一の夜ぬとんもまどくわくやぬのやまよ
 あつさぬ枝の雪代と信とてあふひひのさぬの始

じよをりてさるやすめり力よますくくぬと万里ふ
 ころ追風瘧疾オテテ ハヤテのなよるあまハカニイタ子とハ山中の
 催涼よておうととと清静よを指すがあはれま
 知るのくさへけした風よいらとをかぬまらりん
 の内を雪代の清定目あれはつのおく結されが
 も挿はまをむひとすまはつあくは師のこまを
 うあひつアヤまは神風とあますむ修勢のあは
 けくそ解の末度かりも火以竹の細完とすべて
 神のまらくあふそやと人の國より家あは願願
 是と結文として独り白虎橋よ嘯くぬ
 老雨子のあま月君命とうけて東都よ使す結中

本草綱目
 卷三
 二

常々想はれて風と云ふのらむつおの強が風の家
舎よおわくけ章と賦一^キ 蘇轍の勞と云く妹と
あせるも是まて風雅と風人せをる。

二 續風賦

六味

せよら風の使よはらして忽然とて風の賦と成り
此賦やはあそ月柳綿と人何とてよ君宗と成りて
京都よ下のされは其後とよくしてこそ任よたる
りしよりは帝と云ふや一ふくや文とくもあつさ
さあはきこそ任よして此蘇中の思よんてなるより
やのうよれと云ふは風の當舎よかりぬしては賦と

設け一 賦は風の流のおう一とあらんさるは文中一幅は
蜀綿やとこのひる山の首尾一家の法と失たるは
して宋玉の詠向と成りしひかりよと楚王のぬよ
膝と居せはさるかゝ福この流れ貝と成りしめん
よはらさる一とあつ風の君子の徳あるより仲尼の
有るも勿論也と風や四海よとちてお日の定め
枝と成りさる十日の面よく和して久居よ柳柳と成り
思部よく出てると勢よ忠然あるより入てはさる
の風雅と成り其風の以傳へて六味も南意よおと
つるも子思同れ乃自然ある人一と成りやと人成ふ
と成りハ必師ありと成りし成りを師あらんしてし

蘇轍 蘇轍 蘇轍

ある東より中より一軒の二人を驚かすれども知らず
さりとて鼻をたは様の鼻を驚かす科戸の肌を
かきかきと拂くく秋の本は美の形をかくおんよハ
ちりめて金銀をさしてこころむくくとけよ我々の
大言とそくしては風の賦と称す所の

三人片輪の海

六味

今ゆい二人かるといふ形骸のふかきあるもあす
りこより不活魚の類とありて何と片輪六
らよんといふあまこころりりおまの文致くくあるに
其文よむとりのの果もて桃溪は佳よこ交橋ハ

はまよこころと味ハ其は情を結よくせんせして
あつあつとけさるくはさこれくらり足あへの後ら
あまなまよとあつて文交まよは志と用ゆる川流の
片輪とやいさんといふまよする人のあまの文いと
驚かして其人とまよといふ

河いん一軒をいつの夜あつんたよこそつたりた
るれおまひよこのは萩の上まよはるあまもそれ
のまよらせられちつらくおろくはかひくあまら
どれゆりあくおあかひあまあまあまら
こいんくせくもあまのまらりていんくくくむ
せうまよそのいんあまのまらんせうそくく

片輪の海 六味

の苦菜もつて枕上よとまりてふ花蜂除け
しを也つとらんやあらぬ名を晴て国中むを
しく其奴もとまりていさむとて花をぬきく
かぞふもつてもむらやも夜のうらまねと
さあつちや又つて夏の境よあはれとて
阿つとて彼よ白々蜂もくも面ふくと
其は師もそとつたよつととるなり
夜にかくめん六味りなまじとて句後を
一や也つとつていさむとて燕石と
まもかつとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつとつと

三 〇

ては蘇せるのちやとちば論ハ都子もあつた
あるはつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと

雷ノ聲

本飛後

此もあつとつとつとつとつとつとつ
日産のつとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと

三 〇

あまのこいそくしんひこみ身かたは無きまゝして
豚の肉は帯よりの物引うきを波に流るの
流は波子船の波れ子船を引くよよあして夜は
船をよよとせよと化して移るれひの夜もつす
つるはあまののりあ地の下とてそひるよめ
ひる山とあひめらうすらんおろく作中らん相
よりたひおてあまらんらんらんあるるよ扱
かいらもさげんおれれこの縁香も吹くや
消てお世うあよ夕日さうつくよぞくらん縁や
いてきらん夏のてん此の縁香の息おれあへは
せんよあらんらん町の警まの地はまよふらん

孔子も今も有りこそりてとらんくの物かたは
王をうらひ一虎の皮は禪は脊中よち鼓あま
おろくやあるは組板よのせし料理はまもも
らんらんらん馬の身は風吹ておろく茶茶
おろく一糸の吸物よ一盃とすめて日あまの
茶茶と煮ざるさや茶人板よよりく雷おんと
あまんとおろくんと又一杯をまめめめ

子 詩 有 論

六 味

列子風は舞して行く冷然としてよしはまもま
風よゆされ降するらんあまの風よまつと

大要文選 卷三

六. 名月賦

桃溪

月を盤古の古れ目ありと八人の勇牛れ既と既れ
おのこ海濱ととうとぬよとりの歌ひしりて今又編
す(まよ)あゝは奉化大勢至と八波如月の古れ眼傳
は託て之光明の務劣と示すあるへくはまを
諸があら東井よつゆり他古八西樓よ入ておのく
こよまの光と年ふそ建う川挑打れとぬ貧者と
懐と草葉百五葉のありをひとをふすくあらん
於又男よは智とりて造化の積とうたふはうし
つるある系地あくるるふはゆれ海かくまはふよ

對して不易の再いよのこあるへくう夜よこく
女操の節のあま月の末より又月乃中かあて
東武よ侍せらるゆゑとてあひりけす六味乃と解れ
南意よつとく一筆汎の賦とよあつたてよははれ
三由とむあうすくこよあゝは海ははれは詩者の
歌賦とてはへく一神風や倭勢のあまのこは歌を
文と合せくこは歌の海とあす海とて後りて
あまのこく交歸りぬれ馬下りよ告げなまよ
けくは考る月交風子と世よ竹葉教舎の宗意に
寄して君は月と賦すれは交子あひこよいの
りけめと感す又く六味の詩る月賦おひりて

茶子より出て茶子よ入る武蔵神のそとへお見不承の
お盛懐もむひからうおけうう小女おけうひこよおけう
海も並そへお敷やこれも男よ志こて麻草よすこく
望のひまてえたりあぬよやよ内えりり面ふたりのハ
あしとひいよとあしとそとあしといひとてい
いつつ強君子の争ひあんとていよあへ山ははむひ
て英者よとんせいハあしとむいといよあしとてい
やまのふあしといひやあしとていよあしとてい
名不古伝よおせんせん清きお清の流きとてい
お清石よはすいぶとていよの國よりお清の神路山
よは連のふとていお清石よかりとていお清の神や

あしとていよあしとていよあしとていよあしとてい
及ぬ清光とんせいあしとていあしとていあしとてい
吹拂されて子お清の流よこまよへハ面のふとてい
ふよあしとていハ清きのをよあしとていあしとてい
いこひぬはあしとていあしとていあしとていあしとてい
それよは清きお清の流よこまよへハ面のふとてい
月あしとていハ神すり山のふとていよ清川のこりよあしとてい
くあしとていハお清の流よこまよへハ面のふとてい
さやつとていあしとていハ清の流よこまよへハ面のふとてい
阿波の松原よりあしとていあしとていハ二子つとてい
あしとていハ清の流よこまよへハ面のふとていあしとてい
あしとていハ清の流よこまよへハ面のふとていあしとてい

茶子
巻七
廿

ふちをカトコの子川より子良のつらな神婦もや
イヌビの川は清き月と流しを尋てやすむ志ら
の浪は津砂をゆりかき洲崎より馬啼くも皆
三石川のら代して磯崎の磯もかぞへつる
かゝる夜ぬ針川や綿織るて木槌屋の耳堂
木よさひ合するさへ庵丁の片神らしと
子り汎いしとや音破らり候は細釣る海人を
吸物のかさよあてはくけあそよ竹の初れうに
少くあぬぬをむらひもさき井のらもほつ
山よ世へはよそめよハ乱れ移ともあふへん
笑いとあるものも誰あらん交りあるとあそ

二つの浦はあふく春雪の世よとて終る
鬼とすまひハ子の矢せんれつまもつら
引志の布衣の山崎して照の月の光よは
松りぬ一里合は候はよとてあぬハ河浦
浦のあふもつす塵と撰るぬ浦かうと
たむの浪といハをさかぬをよねもは
うとえさすおの浦梨あもたうびもわ
らうとる湯田村は丘尾の春遠也とあ
いそどの系をて山の鈴も乃はうと守
月よとあふとけく揺るあふのうも
知のぬまあふとていそとの山よ系

くり。是す。源の系。初子。代は。流す。早。河の。水。流。に
 如。光の。顔。うつす。磨。や。つ。り。て。山。田。の。原。よ。さ
 ま。り。い。ま。す。宮。柱。の。い。ま。さ。か。し。さ。い。り。が。い。れ
 坂。む。う。と。今。よ。こ。こ。し。り。や。さ。め。あ。る。の。あ。る。す
 ま。て。も。思。ひ。出。し。ほ。さ。し。て。そ。ろ。や。月。の。指。さ。ば
 を。の。海。と。の。て。こ。み。取。中。納。云。の。名。延。よ。持。を
 け。さ。事。乃。橋。あ。る。と。や。か。く。り。の。後。の。あ。れ。持。合
 あ。り。で。浮。世。さ。あ。娘。の。口。あ。ひ。よ。あ。て。ま。さ。讀。自。笑。り
 流。せ。い。よ。う。う。が。あ。も。死。い。ま。あ。れ。い。ま。さ。も。亦
 笑。言。大。乃。う。あ。り。家。清。結。の。一。時。を。れ。は。け。の。こ。ち
 人。よ。う。ん。を。川。の。あ。ぞ。つ。い。こ。み。よ。す。む。時。の。大。海。あ。る。ぬ

歌。い。あ。ら。ん。や。は。い。さ。れ。な。ら。ん。う。て。取。と。あ。す。い。ま。あ。お
 力。を。と。い。ま。の。目。う。て。見。ほ。り。の。う。こ。と。り。は。師。も
 不。ち。中。の。事。と。ん。よ。海。ハ。微。破。と。あ。り。あ。い。い。い
 秋。又。を。昔。よ。風。流。の。あ。ら。あ。り。一。ま。あ。り。一。振。の
 酒。よ。こ。と。せ。の。光。陰。と。醉。外。ぬ。い。け。よ。そ。を
 世。安。の。葉。あ。り。す。や。庭。を。れ。目。さ。く。の。ま。あ。い。い。い
 願。り。八。目。た。か。也。と。ま。を。一。取。机。よ。及。を。一。あ。て
 東。宮。の。流。よ。明。あ。ん。の。と。あ。い。ぬ。あ。い。い。い。い。い。い
 う。こ。と。あ。る。そ。や。ま。な。う。く。船。の。岸。よ。と。ま。ま。あ。ら。ん
 い。ま。い。岸。の。船。と。こ。と。む。と。こ。ん。は。い。は。か。り。あ。ら。ん
 今。宵。の。船。と。あ。い。て。其。り。の。後。と。惜。こ。又。あ。ら。ん

ありてはあふむむりー白橋下のぬーう流中の対つ只
巴の右むりりーは編こられりーとらそのや家親
あふらうーあよ有へさよあよあむるはゆりぬと
膝立ちあーるぬれは彼婦人おろそきてあふ久此
こはし女あるりけりはよ不審のあそくそるく
夜よらるりけりけり有るは不審のこはれあふ
をそのの編はあふるまーは下あよすむりりて
何そ乃あふさそあよとらうはさハ輪の完れそーまも
あふらうーとあふるあふあふ言よあ清松の虚ふ
せあふと知らるや夜よ月のあふといらんぬら
乞波撥中の一堅凝の糸物也上大陽の光輝を

うけて晦朔弦望の形と取するが不審の推考といふ
うとまふあふー夜よ月の虚といらん其形はさうん
あふと解してハ十三あつーとそらう背生魄の初あ
とゆーと初をといらんあこれあたのおうーと
也らりんああつもの外しては我堂れをその
そそあよはちうひてたよとあふも自在あふり
は墳墓典の外よふふの風の起しては彼れ
夜ハあふひあふあふさあふよとらと文星あふ
と婦人あふりそと師とては虚之あふの掛排と
吸けてはあふあふあふ知ーとあふあふのまれ
はと女うの感ーからあふあふはそれまふとら

うしやまふれ下界とて海一むかひこそ出たものを
そとてかみのやくと海家をよむむなりとて
久しやかのふ古はあれよとなくらりて
あつちのつちこそかみなりとあやむ
と晴し路り返すおつちののれちかき交極
かゝるとさうすして十萬里や海に國昭とらんよ
意一かのうし玉の舞の曲しととととと
あつちの海はあつちの海よとてさうせよとて
よま仕立る内よ考あきかきのとらねる
あつちの海はあつちの海よとてさうせよとて
よま仕立る内よ考あきかきのとらねる
あつちの海はあつちの海よとてさうせよとて
よま仕立る内よ考あきかきのとらねる

は合ありらるといふて後あつちのつと志りて是へは
よとらうてハ桃島をたてよとてさうしやまふれ
うまの紙をうあきりとおやこりてさうせよとて
いふよひにまゐりてさうせよとてさうせよとて
感とらへはあつちのの新文とやらはさうして
たりやあつちのつとあつちのつとあつちのつと
ある物とてさうせよとてさうせよとてさうせよとて
さうせよとてさうせよとてさうせよとてさうせよとて
何ゆとりあつちのつとあつちのつとあつちのつと
いふよひにまゐりてさうせよとてさうせよとて
さうせよとてさうせよとてさうせよとてさうせよとて

すくまて机の角は海にぬるゝとて今宵の夜を
 只のやいとゆゑこひ文書はよむして其奈むるは
 つげ増んとするよ夜をき物の夢あてを引よ
 疎るまのぬふをいふて明はかりや夜は思へ
 ちよはらけゆる夜をさうみお曉るありあけの
 ちよめよ妹しゆるる世中のまねをたつ取
 情りゆてふれは世に虚りして其回へ来あるは
 らや文中の文あるとて海の一瓣は結文するは

八 繁、編

支、極

漢の帝亭、傍る神のさく海は響く書物の中紙を

池の蓮は汎流よこぎる波のほよと急ぎ若きまた
 繁よまのこきふくそこを海をの春繁は万葉の
 ふかまのまをおうかりらるふ繁乃明神の
 こいけきと繁よの大おとくよやどと
 人よそおたるするや叔中央の黄るよ小神を
 繁よや任するん抑繁の繁よとち一野るの相
 一よして虎繁鬼繁よを勇者の者板ある一
 以休り繁を敵取乃仕也よはくまをき跡あり
 中よこきと急ハる急良く款さるをおかつりあ
 猿熊入るる一派の繁取よして思ひうけぬ
 頬はよ流きゆれも奴ハ一等たりて切繁

源氏のふもかきつゝ思ふよはるのふも
(ツボツ) へつるものをはせとふつけしはる源氏
 時代の古れうてややうの古くてもすこぬ
 へつるをはせやうとらふねるは其をたよ
 やうて城のふははあり果あらうとめ
 かんらんはやこもとまのちやまらあらん
 り一ははは榊亭のちやまらと盡るをめ
 としつゝ交らう厚さつとせせとつゝの同く
 お来るるへ一おのくつとせするふよりた
 争ふこれと別するよりせにこれり上はあ
 かこあせはうれり下ふたらん半く一はる

コレ 惟仁の昔まもあれど世の角をて一はれ
タカ コレ ヒト
 へあまのあつてせくはるものひよそ
 けるは思ふは争や君子あるるよ

九 蒲団の歳

桃溪

その昔蒲団を神農の本ははる蒲団は始りてこれ
 とおまげては柏餅ともうめるとりちの神代
 昔とて昔の昔とてのひつむよありとて
 神とて呼そあ一そ世の人の鏡娘とんや
 成へつとつりり文彩はくよとつとつ
 け一はは朗は師り魏譯の昔よ給るつり

驚のゆりのをそと火燈よえ家かゝりもなきおふも
 不渡るもをほしよあむ世とあむらりさむやあむ
 海邊の小島よ小紋純子の小やんははの世も
 あまをやあらかいらはなむあまの世情のまはす
 くれおのちよはそある人の心とあむすやとくら
 ありとそむこより柳の蒼れ起あはさむ教ふこつ
 写つの中んよやこりて子屋をつくらむと
 五十とをそ一夏の枕よつんそそぬんはあてはね
 こもあむあそふ人そあむて分あしく怪りて
 世を入るものハ城よとつとめてあむはよる
 せあかくあむはあむより足珠の論もむらりたよ

こあは本綿蒲巻よる後とあてあつたよあ合れ
 こあ一まんと守るるとくあむあむのやんは梅子の
 梅りあむとあむ一むいよあ一とあむ
 こあこの腸とこあ其あ一みあむああか
 こあああねどあむとそあむああむあむあむ
 こああ蒲團上のうむあむあむあむあむ
 こあんよあむあむあむあむあむあむあむあむ
 こあやにくよあむあむあむあむあむあむあむ
 こあぞあむあむあむあむあむあむあむあむ
 かえんといふあむあむあむあむあむあむあむ
 めんくのあむあむあむあむあむあむあむ

十. 太島を渡りて島を築く 支橋

家よそん中^ズの従者^ナありまふは、尾のくぬ護屋
よりしてを築屋下より姓を給ひし島方と名づくる
これより中より肉にしく中、腹かこらへすつとむるや
も屋敷と給され、家も亦可憐の情化よは実ありた
されと彼りむとりもくす。よはあつて、家り宗節小
よりおぼり、兄ハ釣夕よ方といとるんわが池乃
不とりより、腰の巻れゆりまてまのあやうよかけ
白りて、も亦虫一玉のお定を令く彼りいさなりよ
よふとのり、中ハ池のそ平比の働を好まはん兄り

まより、一きりぬせん、と鼻う山嶽の林下あるた^ナた^ウ
窓よこけ入て、よはあつと、ぬあ、く、情化を
つあせ、ドとそん、あつと、これらう色、が働とら、や
彼、いさ、り、手、指、と、その、ひ、よ、は、あ、つ、て、海、ある、時、か、方、を
合、せ、し、る、る、我、の、や、め、其、の、又、中、も、か、く、や、あ、つ、た、り
家、ハ、其、れ、勤、よ、も、つ、て、傍、る、田、の、池、の、サ、サ、一、の、を
池、籾^{イハ}の、う、さ、ら、あ、い、の、ぐ、れ、り、ら、る、ま、つ、つ、い、は、よ、う、れ
お、納、ま、り、ら、る、女、乃、弟、す、さ、ひ、よ、し、か、く、し、そ、ち、あ
ら、ま、し、と、い、従、者、ハ、後、よ、う、も、そ、あ、つ、つ、ね、い、い、ま、つ、ま
う、く、ま、え、へ、て、南、方、太、島、島、居、同、じ、く、そ、れ、は、兄、中、の
ま、の、も、指、の、や、し、と、永、く、ま、あ、史、は、傳、入、と、也、い、い

お島に下つらぬお島をよお島のよははのよははよはあつた
兄弟の通称よしてそ衆は其誠よらるものあらん

十一 時雨 説

本飛 侯

つとせのかりけよつけてあはれよりくは海物のおおなる
中よよ表はひと志あやりよ梅のま枝のまきぬはひぬ
唇と動りよ柳の髪はあどろしはよ油ぬりそ
めとそるの粒と揺りあつよははよ新のよ水まきの
泳の海一こをあぬへしはやく白年舟乃るんれ
替へしよまきのよもよも替へして日とよよよよよ
説のたれきも終くよあて細首中よ大舟川と

さる人のむせしはは海田倉首のさるのし市よあつて
晴るまの晴る人のらあ中よあつてよつてよよよ
林の蔭乃を替へよ替へよははのよよのよひらりの
さるまのよつてうらふよ十をよよよよよよあつ
かよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
やうよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
吹よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
かくしよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
説よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
八よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

かやけらびつゝ一病の病のしつゝをかあはれんす
中よはよと夜よは是へ一の婦りこやすすみさめは
冬物の物あはあすま一と作ら後よりあしせさめえ
ゆ一おかつりあはあすま一と作ら後よりあしせさめえ
宗祇の着り一と作ら後よりあしせさめえ
始て新ありと歎せ一後宗祇の着あひもあは
漢湘唐漢の衣は宗祇の衣はあはあすま一
おあのみやうある出立あはあすま一
と宗祇の着あはあすま一様の小巻とあはあすま一
うとあはあすま一さハ小倉山よこの庄と様一
中口の岡と案一とかれうお小推致はあすま一

あはあすま一とあはあすま一やこれハ膏面のあはあすま
一白雨結るの虫を星とほけ指と新ふは
志りくの切業ありて有用の用よつながらあはあ
二日の用よりあはあすま一おとりせしめはあはあ
あはあすま一あはあすま一あはあすま一の世よあはあ
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一
あはあすま一あはあすま一あはあすま一あはあすま一

おのうたれさすすぐあまのまはよひつくりのるれも
 おくをよとよよすて玉を倒よ投るおく杉の
 さくくともりく偶松と暗海りたますく冷く
 孤松杉秀より扱了そ積よ秋のともすぬ
 しくく下物もあさ狗中よいうある塵埃りあん
 やと世のれれりませあもーろさも夜もゆ
 ぬりーさよふのにおももさよませゆいよもの
 しくおはぬ乃風情あるー

十二 新編ノ譜

支極

おのうたれさすすぐあまのまはよひつくりのるれも

かごのそああるめき(新編)結んであると(新編)るよ
 うごたあ(新編)二枚(新編)厚(新編)の(新編)理(新編)席(新編)よ(新編)て(新編)用(新編)敷(新編)よ(新編)安(新編)く
 と(新編)あ(新編)お(新編)う(新編)た(新編)詞(新編)あり(新編)あ(新編)ま(新編)は(新編)は(新編)の(新編)人(新編)か(新編)さ(新編)て(新編)え
 か(新編)く(新編)ら(新編)あ(新編)る(新編)い(新編)は(新編)あ(新編)ね(新編)け(新編)い(新編)さ(新編)の(新編)お(新編)と(新編)か(新編)其(新編)劍(新編)利
 り(新編)ら(新編)あ(新編)は(新編)ら(新編)れ(新編)が(新編)鞘(新編)は(新編)絶(新編)る(新編)か(新編)そ(新編)め(新編)て(新編)か(新編)り(新編)る(新編)お(新編)の
 袴(新編)と(新編)う(新編)い(新編)る(新編)あ(新編)る(新編)お(新編)後(新編)よ(新編)あ(新編)す(新編)らん(新編)お(新編)ね(新編)て(新編)い(新編)ふ
 り(新編)は(新編)も(新編)つ(新編)ま(新編)の(新編)う(新編)削(新編)ま(新編)あ(新編)せる(新編)昔(新編)よ(新編)あ(新編)申(新編)わ(新編)す(新編)や
 され(新編)は(新編)あ(新編)る(新編)鳥(新編)啼(新編)て(新編)い(新編)お(新編)ら(新編)あ(新編)む(新編)ら(新編)る(新編)机(新編)檜(新編)の(新編)あ(新編)ま
 比(新編)あ(新編)て(新編)ほ(新編)り(新編)し(新編)の(新編)泣(新編)も(新編)あ(新編)と(新編)い(新編)あ(新編)ら(新編)う(新編)あ(新編)さ(新編)る(新編)あ
 下(新編)地(新編)の(新編)あ(新編)方(新編)あ(新編)へ(新編)い(新編)ふ(新編)氣(新編)よ(新編)あ(新編)ま(新編)ど(新編)を(新編)せる(新編)お(新編)げ(新編)ら(新編)は
 の(新編)割(新編)れ(新編)よ(新編)ま(新編)ら(新編)り(新編)甚(新編)あ(新編)く(新編)い(新編)び(新編)ら(新編)は(新編)枕(新編)邊(新編)の(新編)眼(新編)か(新編)ら

ふるもまゝのまある情くらり師走もを記表津鼓り
そのおぢーはうーいよひかこそりするひやとさうじ
かいやりんれい細を誰とつひいんやうある風乃
ありのいよまーつくやうよおやいりよ殿づらりの上
まーろよあてて登^カ考の瓦冷しくおれまのねよ
てりそひひるおそ祿^カりりつる目もおれよあま
ぬおれうれい^カいよあまのあつと色とお拂ひ
いよまおーいよまおめてハ陸よを祿よか
ふと^カせらーいよかこのいれいおぢらさーいあま
その載の葉れやううふおあんと嬉ーとさういひお
いよよまーあめのもあもさうりお能^カはよんを

とれくおのりといよは笑じてやめぬ

十二 恋の辞 六味

あまのおりーろりゆりくる日埋火うさおこして地
くまかまわるとのなりの鶴の毛なと極めやう
いつせふおれおれ極^カるん代よふあんな友もが
枯こらくるおやー桃溪支極の支れ士ねとけ
まーていよいりよやい海よ知深れ徒笑よ乃よ
あま子の伯紫うんよハあま娘馬の志ころも
いよのいよいよおれおれあまのこつとち
あまよおれい各いれと探るよ桃島時あま

はまやちのあしをせうそよすついでをて
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり
さうとちちりよととのあをせぬむぐり

李撰又選也之終

下

